

自ら選び取った蹉跌により 百尺竿頭に唯一人坐す

——林紘義氏と一エンゲルスの『資本論』修正問題の本質——

2004.12

直記 彬

発行 2005.9.25

ワーカーズ

自ら選び取った蹉跌により百尺竿頭に唯一人坐す

——林紘義氏と一エンゲルスの『資本論』修正問題の本質——

《はじめに——何とも不思議なマルクス主義同志会の組織性格》

この九月、前号から実に一六ヶ月ぶりに『プロメテウス』第四六・四七合併号が出版された。知る人ぞ知るマルクス主義同志会の機関誌である。

ほとんどの人が聞き慣れないマルクス主義同志会とは、十二年ほど前のことになるが、私たち「ワーカーズ」が袂を分かった社会主義労働党という組織が母体となり結成された。社労党は、六〇年代に結成された全国社研が七二年にマルクス主義労働者同盟と改編されて、八四年に結成された。この段階で停滞していた組織がオーバーホールされたのだが、その効果は長続きしなかった。これらの期間中、一時期は、確認団体として国政選挙を何度か闘ったこともあり、注目されたこともあった。しかし衰退激しい社労党が、今後政治組織として活動していく展望を失ったため、新たにマルクス主義の普及・拡大をめざすサークルにまで、自らの決断で撤退して結成された組織なのである。

注目すべきは、その会則の第四条に、「会としては、全般的な公然たる政治闘争（つまり選挙・議会闘争）には参加しないが、個々の会員が参加するのは自由である。また、個々の政治闘争、組合闘争への参加も自由である」と謳っていて、本当は政治サークルか研究サークルか分からないような中途半端な組織性格を持つことだ。それゆえ私などは社労党『プロメテウス』の名前を引き継いだマルクス主義同志会の機関誌の発行が遅延した理由を、この間の組織的停滞のためだとばかり考えていたが、実際はもっと理論的にも組織的にも相当に深刻なものがあつたようだ。

巻頭言には、「小泉の“反動攻勢”に反撃を！」との勇ましい題が付き過激な文字が躍っている。そして最後の段落は、「こんな状況が続いたら、事態は人々の予想を遙かに超えて進展しかねないであろう。『まさかそんな』と思っていたことが現実となり、また次々と既成事実が積み重ねられていって、気がついてみたら、戦後の平和主義・日本がすっかりと様変わりしていたといった具合にである。いずれにせよ、日本が今、歴史の大きな転換点に立っていることだけは確かだ。こうした中でどう反撃し、展望を切り開いていくか。労働者階級の闘いもまた正念場を迎えている」と結ばれている。確かに私も同意見であるが、会としては、全般的な公然たる政治闘争には参加しないと明言する組織の機関誌にしたり顔で書くべきことなのであろうか。先にこの組織が中途半端な組織性格を持つと書いたが、まさにこの通りの実態なのである。

ところが次の頁をめくると「エンゲルスの『資本論』修正と我々の議論——〇三年労働者セミナーの議事録とその意義」と題された林紘義氏の巻頭論文が目に入る。この機関誌の構成は、その論文後に、第一部首都圏のセミナー、第二部関西のセミナー、第三部資料・三人の講師のレジュメ、最後に二〇〇四年労働者セミナー参加の呼びかけとなっている。

《準備不足で唐突な『資本論』修正問題の提起と今秋のセミナーの呆れた位置づけ》

『プロメテウス』合併号として、今秋の労働者階級の闘いの正念場に、具体的諸情勢の分析と闘いの方針を提起するのではなく、何と一年も前の労働者セミナーの議事録を、多大な出版会費を費やしてまで出版することに決した彼らの問題意識を、この「参加の呼びかけ」からの引用で、確認することから始めたい。彼らはこのように切り出したのである。

マルクスの草稿を手にして、詳しく検討することが可能になるにつれて、エンゲルスが編集して出版した「資本論」——現行の——「資本論」——と、マルクスの草稿の間 に大きな違いがあること、エンゲルスはマルクスの草稿にかなり広汎に、そして徹底的に「手を入れて」いること、しかもその「手の入れ方」がかならずしも正当であり、適切であるとは言えないということ、というより、むしろひどいものであることが確認されてきたのです。

これは決定的に重大な問題であり、エンゲルスの根本的な評価を問うほどのものでした。果たして、マルクス主義をマルクスとともに、エンゲルスの名で呼ぶのは正当なことなのか、呼んでいいものなのか。これまで高く評価され、喧伝されてきた、社会主義の運動と理論に対する、エンゲルスのあの大きな“功績”はどうなのか、それらもすべて「無に帰す」ということなのか、またそんな風に結論していいのか。

エンゲルスが「資本論」の編集刊行にあたり、何かおかしな修正をしているということは、すでに一九二〇年代にソビエト・ロシアにおいても問題になったのですが、スターリンが握りつぶし、エンゲルス絶対化を全世界の共産主義連動と労働者階級に押しつけることによって、長い間、タブーになってきて、ようやく一九八〇年代ころから、自由に検討できる雰囲気になってきたのです。

我々の中でも、昨年の「労働者セミナー」でも、エンゲルスの修正とその評価をめぐって大論争になりました。“左翼の”学者の中でも、あれこれの議論があるのは言うまでもありません。

かくして、我々の前には、この一世紀もの間、いわば絶対的とも言えた、エンゲルスの権威をどうするのか、エンゲルスの全体としての、あるいはその根本的な評価をいかに確定するのか、という決定的な問題が、客観的に提出されているのです。

全世界で闘われている労働者の解放運動、社会主義運動はこの重大問題に正しく答えることなしには、新しい一步を踏み出すことができない状況にある、と言って決して言い過ぎではありません。

エンゲルスの「資本論」修正問題をいわば“悪用”して、マルクス主義を攻撃したり、あるいはそこまで行かなくても、マルクス主義を歪曲したり、おかしな解釈を押しつけようとする意識的、あるいは無意識的な試みもますます活発であり、こんごさらに活発になって行きかねません。“流行”に乗って、何でもエンゲルスは悪いと言えればいい、といった風潮さえなくはないのです。

かくして、我々が今秋の「労働者セミナー」で課題として取り上げるのは、「エンゲルスの評価」という決定的に重大な歴史的、理論的な問題なのです。

ここで私たちがしっかりと確認できるように、「全世界で闘われている労働者の解放運動、社会主義運動はこの重大問題に正しく答えることなしには、新しい一步を踏み出すことができない状況にある、と言って決して言い過ぎ」ではないと彼らは書いている。そして、彼らは今秋の労働者セミナーは決定的に重大な歴史的・理論的な意義を持つとまで言い切るのである。

この歴史的・理論的課題と自らが巻頭言に書いてきたこと—小泉改革と対決し展望を切り開く—との実践的課題とは、行動としては、全く同時進行ができない。しかし、それぞれ現下の最大の問題だと言ひ募る彼らには、全くもって呆れるほかない。それにしても、この重大問題が解決されない限り、全世界で闘われている労働者の解放運動・社会主義運動は、新しい一步を踏み出せないとは。私たちには、こうした彼らの問題意識に、共感できるものがあるであろうか。そんなものはもちろん一切ない。問題は自らの活動力の低下をこのように言いくるめる卑劣さである。そして彼らは自ら免罪符を手にするのである。

それにしても『資本論』討議の土台となるテキスト本すら、会として、認定も一本化していないマルクス主義同志会が、『資本論』の編集について、夜郎自大なセリフをここまで云々することができるとは、私たちにとってはただただ驚き以外のなにものでもない。

昨年の討議でもレジュメを提出した三人の講師の中、田口氏は当初の見解を「固執しない」とし、平岡氏は撤回している。ただ一人林氏だけが、一部「労働者セミナーなどでの議論や批判を受けて訂正、修正した箇所」もあるとして、書き換えたものを平然と掲載している異様さだ。ここは、最初に提出したレジュメを、討論の理解のためにも掲載するのが礼儀ではないだろうか。全く呆れてしまうマルクス主義同志会内の「常識」ではある。

それはともかく、このように何と二人の講師が、報告時の立場を変えてしまったのだ。ここには、『資本論』編集問題に対するマルクス主義同志会としての取り組みの不統一と各講師の準備不足が、明々白々な形で、歴然と露呈している。この討議では、この間エンゲルスの編集に問題があるとの立場で、第二部の拡大再生産表式を書き換えたこと等を問題にした田口氏のレジュメと討議を始めるきっかけを作った大谷禎之介氏に依拠して第二巻第二編第十六章の「注三二」を問題にした平岡氏のレジュメなどは、徹底した批判にさらされ、大谷氏の親共産党的立場が、真意の理解をゆがめたなどと理論外の原因が指摘されたほどの過熱ぶりではあった。こうした事態の出来を、林氏自身は、一連の討議の深化と展開により思わぬ結果が出たとたいへんご満悦のようだが、真理が討議で決まる場合もあれば決まらないこともあるのは、自明のことだ。真理が討議でいつも決まると考えるのは、真理のなんたるかを何も自覚しない人だけである。そもそも、真理とは、討議による多数決や口のうまさや押しの強さで保証されるものではないからである。

《『資本論』決定版の必要性》

それに未だに『資本論』の訳本の決定版はない。エンゲルス編集の『資本論』がおかしいというのなら、まず『資本論』のこの部分の編集がおかしいとの注がある決定版の作成から始めなければならぬことは全く明らかではないか。

マルクス主義同志会が、討議の中でこうした本質的な確認もできず、またマルクスの草稿として

出てくるものが部分訳でしかなく全体像が見えてこないと嘆いてみせるのは、何とも底の割れた芸のないことではある。

実際、林氏が新発見の草稿の訳文を本文に書き込みまでして、ここ数十年一貫して執着し使用する訳本は岩波文庫版『資本論』向坂訳である。ところがこの訳本の実態とは、弟子の岡崎次郎の下訳したものを、師匠である向坂が、弟子の仕事をもたらるのは当たり前だとの理由で一方的に取り上げて、自らの名前を付けて出版した悪名轟く不適切訳の多い最悪の訳本なのである。

事ここに至っては、林氏は、岩波文庫向坂訳に、自分がここまで肩入れしている理由を明らかにしなければならないのではないのか。端的に聞けば、岩波書店から出版されているからなのか、共産党系の翻訳者でない向坂氏の訳だからなのか。一体、そのどちらなのであろうか。大いに興味を引くことではある。それはともかくとして、岡崎氏は、強引な向坂氏の理不尽さに対する無念さから、取り上げられた訳本を、執念で改訳してマルクス・エンゲルス全集訳として完成させた。この間の事情は『マルクスに凭れて六十年』に詳しい。このように岡崎氏が一層精進して完成させた訳本を、さらにその後改訳までして大月書店『資本論』普及版として刊行してきたことを全く知らないとしたら、林氏は正確な翻訳の大切さや『資本論』翻訳史に対する自らの無知を公然とさらすものである。

実際、『資本論』はマルクス自身が仕上げていなかったことから明白なように未完成である。その完成をめざす一方で、青年客気により一気に書き上げた『哲学の貧困』を、マルクスが改訂しようと計画して努力していたことから、『資本論』完成途上におけるプルードン批判の重要性を、マルクスが再確認していたことは十分に推察できる。だからといって、エンゲルスの編集の『資本論』がどうしようもない著作だとの判断を私たちは軽々には採らない。それは現実に存在している刊行本として、様々な編集本の一つとして評価できるものだ。なによりも現代に通用する『資本論』の決定版の刊行は、今後の私たちに残された宿題である。かくて、私たちが確認できるのは、林紘義氏に象徴されるマルクス主義同志会に骨がらみになっている二つのジダイ主義の存在なのである。

《『プロメテウス』第一八号で確認できる呆れ果てた事大主義》

一つは、彼ら自身認めているように、一九二〇年代にソビエト・ロシアにおいても問題になってはいたが、スターリンが握りつぶし、エンゲルス絶対化を全世界の共産主義連動と労働者階級に押しつけることによって、長い間、タブーになってきて、ようやく一九八〇年代ころから、自由に検討できる雰囲気になった、と今頃になって真顔で述べることができる呆れ果てた事大主義である。

こう述べている彼ら自身は、そのような雰囲気醸し出された中で、何と『プロメテウス』第一八号で、つまり一九九五年夏季号において、エンゲルス没後百年を特集し、相対化され始めたエンゲルスの権威を、声高に擁護し再絶対化に大いに貢献したのであった。

十年近く前のことでもあり、彼ら自身忘れていたかも知れないとの老婆心から、過去の言動が、現在の醜い姿を鋭く照らし出している例として、特集号に掲載されている五論文の題とその核心的内容を、今ここで紹介しておく。林紘義氏には、この「エンゲルス没後百年」の特集号で、

自分が果たしてきた役割を今深く反省しているかどうか、すぐにでも聞きたいところではある。それほど当時と今の立場は異なっているからである。

論文の題は、順番に紹介していくと、エンゲルス小伝—科学的社会主義の創設者の一人、エンゲルスの輝かしい生涯（山田）、エンゲルスとマルクス主義—エンゲルス批判者の“哲学的”基礎（林）、自然弁証法について（横井）、エンゲルスは改良主義を準備したか？—第二インターの改良主義とエンゲルス（平岡）、家族とは何か。それは人類と共に古いか—現代におけるエンゲルス家族論の意義（田口）の五論文である。

内容については、紙面の関係で、核心的なものに限定しておく。まず山田氏は、先の論文の中の、「とだえることのない交流の中で資本主義の分析と解明」の小見出しの処で、両者の緊密な交流を指摘した上で、「こうした共同作業の上に現在の『資本論』第一巻が完成したのである。そしてマルクスにとってはエンゲルスの忠告や助言こそ、最も大切にすべきものであった」と述べた後に「エンゲルスこそ、マルクスの仕事の意義を最も正しく深く理解していた人間だ」と結論した。さらに、「マルクスの死と『資本論』の編集、出版」の小見出しを付けた処では、「引き続きヨーロッパの社会主義者の相談役または指導者としての役割を果たしつつ、また『資本論』第一巻の増訂第三版（八三年）や『賃労働と資本』の新版（八四年）、『哲学の貧困』のドイツ語版（八五年）の刊行など、マルクス主義の基本文献の普及や案内の仕事をこなしつつ、八五年に第二巻、そして九四年に第三巻を刊行した。まさにこの二つの巻はマルクスとエンゲルスの二人の労作となったというであろう」とした。ここで確認できるようにエンゲルスの『資本論』編集など問題にもしていないでエンゲルスとマルクスの一体化を強調した「見事なまでの祝賀論文」なのである。続く林紘義氏の総括的論文は、「エンゲルス批判の全体的眺望」の小見出しの処で、「エンゲルスを、そしてマルクス主義を否定するためにのみ、マルクス主義やエンゲルスについて論じている」と特徴付け、「我々は本質的な一致をこそ確認する！」との勇ましい小見出しの処では、「同じ観点に立ち、同じ思想に立ち、同じ階級的視点にたつて、しかも一生をかけて闘ったと言うことは並大抵のことではない。こうした意味で、エンゲルス非難はマルクスの非難に、そしてマルクス主義一般の非難に通じている。これはエンゲルスを非難しているどんな人物を取ってきても、エンゲルスを非難しながらマルクス主義を擁護している人をしらない。エンゲルス批判者はほとんど例外なく、エンゲルスの名を借りながら、結局マルクス主義攻撃している、あるいはそこに行き着いている」との「堂々たる結論を述べた論文」である。しかし、この論文の真の意味での「見事さ」は、十年後の林紘義氏自身の立場を実に明確に批判している点にこそあるのである。横井氏の論文は、『自然弁証法』が、昔は書いたという罪で告発されたことに触れ、最近では書かなかったという点で批判されていることについての論文である。もちろん『資本論』編集に関わったの記述はない。平岡氏の論文は、ベルンシュタインやカウツキーがエンゲルスの思想を歪めたことに反論した論文であるが、『資本論』編集については一言もない。最後の田口氏の論文は、マルクスの『古代社会摘録』に依拠しつつ今日の立場から『家族・私有財産・国家の起源』の若干の不備を補修して、批判が多いエンゲルスの家族論を擁護したものである。ここにも当然のことながら、『資本論』編集問題は、いっさい出てこない。

これらの論文が果たした役割は、核心部分を紹介したことで充分明らかである。それは、エンゲルス没後百年で問題となったマルクスとの関係について、各論者・各種のエンゲルス非難から、

全面擁護したものであった。

ほぼ同時期に、その当時流行であったエンゲルス批判に腹を立てて、信山社出版から『エンゲルス讃歌 没後百年記念』を出版した奇人な人物に中村静治氏がいる。彼は、武谷技術論の徹底的な批判者で、新左翼系の星野氏や中岡氏の技術論をも批判する筆頭人物である。当然にも親共産党系の理論家である。その中村氏は、後日、このエンゲルス没後百年特集号に対して、当時のエンゲルス評価に対する反撃として、「類書を抜く高水準のもので、感服した。このような書き手を揃えた社会主義労働党とその理論誌の存在を知らなかったのは不勉強の至り、慚愧に耐えない」（『資本論』と『論語』 信山社出版）との高い評価を寄せていることを、この際マルクス主義同志会の面々にもお知らせしておこう。

《今回の労働者セミナーの不誠実と不徹底》

今回、エンゲルスの再検討をテーマとして行われる二〇〇四年労働者セミナーでは、四つの報告がなされるという。最初にエンゲルスの哲学理論—唯物史観形成への貢献度をめぐって（杉原）、エンゲルスの家族論—その意義と限界を点検する（田口）、エンゲルスによる『資本論』修正—商業信用とは「商品をもってする」前貸しか（林）、最後にエンゲルスの経済理論—「冒頭の商品」の位置付けを中心に（亀崎）が行われる予定だという。

何ともご苦勞なことではある。約十年前、誰に頼まれたでもなく、自らエンゲルスを天まで持ち上げておいて、今頃になって急にくさそうというのだから、彼らのそうした粗雑な頭の構造と無神経に私たちは驚く他はない。しかし、自らの言動に誠実であるなら、約十年も前に発表済みの先に紹介した五論文を踏まえて、それぞれの自己批判的エンゲルス批判論文から始めなくてはならないことは自明である。

今年の秋、エンゲルスを再検討するというのなら、どうしてこのような隗より始めよの精神がないのであろうか。とりわけ山田氏には、特集号で、輝かしい生涯と美化してきたエンゲルス小伝の書き換えが不可欠の課題となる。その眼目は言わずとしてれた『資本論』編集問題である。その場合、マルクスが死去してからのエンゲルスは、林氏が言うごとく晩節を汚したのかどうか、一体全体今問題となっている『資本論』編集が、なぜそのようなものになったかについては、ぜひとも説得的な説明がなければならない。大いに私たちの興味を引く問題ではある。さらに当然にも「エンゲルスとマルクス主義—エンゲルスはマルクス主義にどのように関わってきたのか」を内容とする総括的論文を、ぜひとも林氏は指導者の自覚を持って今回は準備せねばならなかった。それこそ率先垂範の生きた実例である。しかし彼らにはこの責任は果たせそうもない。

マルクスやエンゲルスはもちろん、人間誰でも間違いを犯すが、問題は決定的な過ちはしないことまた過ちを犯したと自覚したその後、どのような態度を取るのかということ、この一点だ。林氏には、この点での誠実さが、決定的と言えるほど欠如しているのである。

《驚くべき夜郎自大と自大主義》

もう一つは、どうしようもないほどの自大主義である。この決定的で特徴的な驚くべき夜郎自大

には、しっかりと批判を加えておく必要があると私たちは感じている。

先に一部引用した「呼びかけ」の後半部分にも、『資本論』修正問題は“間違った”とするなら、エンゲルスの他の理論や実践はどうなのか、再検討する必要はないのか。哲学とか、経済理論とか、家族の理論とか、他の多くの理論や実践の分野でも、エンゲルスは自らの欠陥を暴露していないのか、あるいは他の分野では正当であり、健全であったのか。そして、もしエンゲルスがひろい分野で欠陥を暴露しているとするなら、それは決してどうでもいいことではなく、我々自身がきちんと再点検しなくてはならない課題であるわけです。今回の我々の労働者セミナーは、まさにこうした大きな課題に答え、その問題を追求するために開催されるのであって、昨年の労働者セミナーの問題意識をさらに深めるためのものとして計画されたのです。全国の多くの労働者、青年が、この“世紀の”大問題を真剣に検討し、考え、議論するために結集することを期待してやみません。それは必ずや諸君をマルクス主義に向けて啓発し、大きな視野を切り開く、“啓示的・黙示録的”なセミナーとなるでしょう。この腐敗堕落した、荒涼たるブルジョア社会で、いかにたくましく生きていくのかの回答も隠されているかもしれません」との文章が確認できた。

それにしても、「ブルジョア社会で、いかにたくましく生きていくのかの回答も隠されているかもしれ」ないとは、何とも聞くに堪えない世迷い言ではないか。彼らによれば、マルクス主義は、まるでたんなる人生論の一つでもあるかのようだ。だがこの発言がほんの十年前の自らの姿を顧みたまで為されなければならない真剣な自己批判を、少しでも含んだものでないことは一読して明らかである。

世に一周遅れのトップランナーという言葉があるが、マルクス主義同志会は、まさにそれ以上の何周遅れだかも分からないのに、自分自身はトップランナーのつもりなのである。スターリンの呪縛が解け、エンゲルスの再評価が始まっている最中であって、それに抵抗し一切の反省と敵対して、恥ずべきエンゲルス美化をし続けてきた彼らが、今では何と、エンゲルスが、ベルンシュタイン顔負けの最大のマルクス修正主義者であるかに言い立て始め、林氏のこの間の突然のエンゲルス評価の転換が、同志会会員間に動揺を走らせる。

「すべてを疑え」をおのがモットーとして、『資本論』の序文に「科学的批判による一切の意見を歓迎する」と書き付け、そして「私はマルクス主義者ではない」と言ったマルクスはもちろんのこと、マルクスと比較してこそ、若干の弱点が看取されるエンゲルスすら相対化できず、いかに優れた人ではあれ肉体を持つ人間を、信仰の対象の神にまで祭り上げてきた同志会の頑迷なマルクス教信者としての本質が、今決定的に暴露された。

次に提起されてくる問題はといえば、いままで一貫してエンゲルス盲従主義者の彼らに、自主的に問題を解決する能力は果たして未だ残っているのかという大問題である。このことを誰よりも自覚している林紘義氏は、首都圏セミナーのパネルディスカッションにおいて、思わず知らず、「理解力の不足といったら、何も批判することはないじゃないですか。エンゲルスは頭が悪い。そんなことは言えないですよ。階級的に問題があるとか言えても、エンゲルスは頭が悪いなんて、恐ろしくてできないですよ(笑)」と発言してしまう。

マルクス『資本論』の編集をなぜエンゲルスは歪めたのか。エンゲルスは階級的に問題があるとは言えても頭が悪いとは言えない—林氏は恐ろしくて断言できないと自分の提起におののき、この発言を聞いた会員は思わず失笑する。まさにこの問題は彼らにとっては直面する「世紀の大

問題」なのである。この点、マルクス同志会会員内でのアパシーの深さや彼ら自身「啓示的・黙示録的」になるのも、私たちは充分頷けるというものである。

《百尺竿頭に唯一人坐す林紘義氏の蹉跌》

先に、「エンゲルスはマルクス主義にどのように関わってきたのか」についての総括的論文を林氏は準備せねばならなかったと指摘したが、種明かししておけば、思わず知らず自分の発言におのいた茫然自失の林氏には、とても準備などできなかったのである。最後に、今回のエンゲルスの『資本論』修正問題の本質は、マルクス主義同志会を誰が主導するかの問題だと私は端的に指摘しておく。その手段としての林紘義一流の「整風運動」がエンゲルス編集批判なのである。その証拠に指導者である林紘義氏の関西セミナーでの呆れた最後の言葉を引用しておく。今回も、過去何回も行ってきたように「整風運動」で圧倒的に勝利して、我一人天を行く勢いの極楽とんぼの林紘義氏は、安心したあまり、今後に関してこう自らの本音を漏らす。

エンゲルス版には、いろいろ問題があると思います。もうこうなったら、読んでみておかしいと思ったら、「おかしい」といって残しておいて、将来に解決をゆだねるとか、そういうこともあっていいと思います。実際に東京のセミナーで私と平岡氏と、ここで切れている、切れていないと対立しましたが、それは草稿が出てこないないという意味で決着がつかなかったかも知れない。幸い出てきてくれて私はよかったです。もう、こうなったら、学者などに依存するとか、参考にするとかではなくて—もちろん、それも一面ではいいことなのですが—もうちょっと自分で考えるという努力をしていくべきだと思います。そういう意味でがんばっていきたいと思います。どうも二日間ご苦労さまでした。

ここに示されているのは、まさに世間知に長けた大人の分別である。しかし、これまでのエンゲルス盲従の態度といい、昨年のエンゲルス批判に費やした大騒ぎは、林氏にとっては一体何だったのであろうか。私たちが確認できるのは矮小な人格、これしかない。

小泉構造改革との全面的対決の重大な時期と重なるにもかかわらず、いまだエンゲルス再検討が労働者階級の課題だのご託宣には、「先駆の仕事をやっておせたら、先駆者は死ぬ—でなければ、変節する」とのハイネの名言が、今でも真実であることを私に実感させるに充分だった。七〇年代の林氏は、私たちを引きつけた先駆者ではある。

最後に、林氏のかくも無惨な変節を確認して、この論文を締めくくろう。

初期のマルクスを後期のマルクスやエンゲルスに対置するのも、結局は、初期のマルクスに“人間主義的な”観点を見出しているということではなく—もちろん、マルクスの初期の見解にはヒューマンイズムのものだけではなく、史的唯物論に発展していく契機を濃厚に持っていたのだが—、何かそれだけを取り出してきて、これこそが“本来の”マルクス主義であるかに叫びちらす。しかしそんなものは、彼らがプチブル的自由主義的本性に合わせて理解したマルクス主義(カニはこうらに合わせて穴を掘る)、実際上のやり方、こうした道

は不可避免的にマルクス主義の否定につながるものとして断固として 拒否せざるをえないのだ。
(『プロメテウス』第一八号四三頁)

このように十年前の林氏のエンゲルス批判者に対する実に手厳しい論難は、先に引用してある核心部分と相俟って、現在の林紘義氏の立場を、的確にそして確実に打ち据えてやまない。それは林氏が自ら選び取った蹉跌ではある。本当に、エンゲルス批判はマルクス主義の否定となるのか。そうだとしたら、それはただちに、会則の第一条に「科学的社会主義（マルクス主義）の根底を承認し、その普及、拡大のために、そして資本の支配に反対して、实际的・組織的に活動する意思のある人は会員になることができる」を掲げるマルクス主義同志会を根幹から揺るがす決定的危機へと直結するのである。

さてはて、百尺竿頭に唯一人坐す林紘義氏は、この百尺竿頭から、自らの意思で歩を進ませることができるであろうか。今まさにそれが決定的に問われているのである。(鈴)